

- 平成29年度学内版GP成果報告
望月 勝徳講師, 高木 直樹教授
- 私たちがつながる働き方
- 活動報告
- スタッフからひとこと



平成29年度学内版GP成果報告 vol.2

前号に引き続き、平成29年度学内版GPに採択された取り組みをご紹介します。

また、現在、平成31年度学内版GPの公募を開始しております。今回は、『第三期中期目標・中期計画』の重点項目である次のいずれか（もしくは両方）に該当する教育取組を応募対象といたします。

- ▶ 受講生の主体的学修を促す教育実践
- ▶ 受講生の達成感（＝自己効力感、等）を上げる教育実践

詳しくは高等教育研究センターのホームページにてご覧いただけますので、ご興味のございます方はぜひご覧ください。

<http://www.shinshu-u.ac.jp/institution/rche/approach/campus-gp/2018/07/17577.php>



学術研究院医学系 望月 勝徳 講師 「救急患者シミュレーション実習」

取り組みの背景

医学部医学科の臨床実習(クリニカルクラークシップ)では、実際の患者に対して診察を行い、その結果に基づいて指導医とともに検査方針や治療方針を検討することで臨床能力を獲得してゆく。しかし、時間的猶予のない緊急性の高い救急患者が対象となる場合、十分に時間をかけての診察や指導医との協議は困難である。そのため、実際の患者に対する診察のみでは、緊急時診察、緊急検査計画、緊急病態の医学的判断、緊急処置等の経験は積みにくい。

本取り組みは、緊急性の高い病態を想定したシナリオで、マネキン型シミュレーターに対する模擬診療を行うことで、医学生が通常の臨床実習では学修困難な、救急患者の対応経験を積むためのものである。



取り組みの内容

本取り組みでは、6～7人の医学生が1チームとして救急患者対応の模擬診療を行う。また、ファシリテーターが患者役、患者の家族役、病棟看護師役等で介入する。加えて、医学生が自らの判断に基づいた診療で、救命というシナリオの目標にたどりつけるよう、ファシリテーターが支持的な介入を行う。訓練の最後に、ビデオ撮影した自分たちの模擬



診療の様子を見せながら、医学生に達成できていた点と改善を要する点を考えさせ、全員で発表しあっている。

取り組みの効果と今後の展望

本取り組みでは、医療チームとして模擬診療を経験することで、コミュニケーション能力、役割分担等の組織的活動能力、リーダーシップのとり方等、チームワークを発揮するための能力が訓練される。また、ファシリテーターの介入によって、患者や患者家族への接遇、および他職種との連携業務の経験ができる。加えて、医学生は「自らの判断に基づいた救命」という医師特有の成功体験を得ることで、自己効力感を自覚することができる。

これらの能力は、単回のシミュレーション訓練のみで完全に獲得できるわけではないが、訓練の振り返りで、各々の学生が感じた自分たちの診療の改善点をチーム全員で共有し、その後の臨床実習で修得すべき課題を見つけられる。

訓練最後の発表会では、毎回実践的な改善点が発表され、他者の意見も踏まえて各学生が具体的な課題を含むポートフォリオを作成している。本取り組みを臨床実習の前半でおこなうことで、以後の臨床実習での医学生の主体的な診療参加による学修を促し、診療参加型臨床実習の教育効果が高められていると思われる。

今後は、学生が作成したポートフォリオ等をデータベース化して解析を加えることで、さらに効果的な訓練となるようブラッシュアップしていくことを目指している。



背景

森林系の学生は、「造林」、「緑地計画」、「木材組織」などの木に関する上流側について学修を行っている。建築系の学生は、木に関する下流側である木材としての「構造」、「計画」、「環境」の面について学修している。今日の木質資源を取り巻く社会においては、森林系と建築系に分離した学修では対処できない課題が生じている。例えば、COP21に基づく木材の炭素固定、ライフサイクルアセスメントによる環境配慮設計、木質バイオマスの利活用、直交集成板(CLT)工法による最新の建築技術など、多面的な視点を持った総合的教育プログラムの構築が必要となっている。

実施内容

両学科に共通する「木質資源」をキーワードとした講義、演習、実験を横断的に教育するシステムを構築する。これにより、「森林から建築」の知識と情報を得た人材が、社会において氾濫する様々な課題に対処できる様に養成することを最終目標としている。



←農学部における実習風景2



→工学部生作成のベンチ
工学部内で使用中



←農学部生による住宅軸組模型

学科 コース	農学部 農学生命科学科 森林・環境共生学コース	工学部 建築学科 建築学プログラム、 工芸デザインプログラム
対象学生	学部 1年生～4年生	学部 1年生～4年生
講義科目	<ul style="list-style-type: none"> ・環境と緑の文化 ・森林サイエンス ・森林・環境共生学概論 ・木材工学演習 ・森林デザイン演習 	<ul style="list-style-type: none"> ・人とすまい ・設計基礎Ⅰ ・設計基礎Ⅱ ・設計基礎演習 ・建築環境工学実験

▼松本キャンパスにおける開講科目の受講

1年生については、松本キャンパスにおける相互の学科の開講科目を各々の学生が受講できる様に便宜を図る。

- ・SUNSを活用した授業の実施
学内のSUNSを利用し、相手側の学生に対しても画像データを用いた遠隔授業を行う。
- ・教員の移動による授業の実施
農学部所属教員が長野(工学)キャンパスに、また工学部所属教員が伊那キャンパスにそれぞれ出向いて講義、演習、実験を行う。
- ・学生の移動による授業の実施
それぞれのキャンパスにある装置や施設を使用する場合には、学生の移動により授業を行う。その場合、学内の自動車やバスの他、公共交通機関を利用する。

▼昨年度実績

昨年度において農学部3名、工学部2名の教員による実施体制であった。延べ25人の学生がこのプログラムに参加した。このうち、松本キャンパス受講者：16人、長野(工学)キャンパスでの森林学科受講者：4人、伊那キャンパスでの建築学科受講者：5人であった。

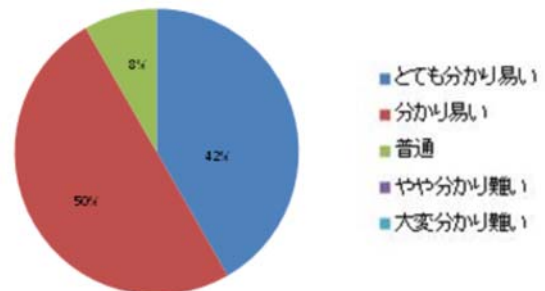


農学部における実習風景1

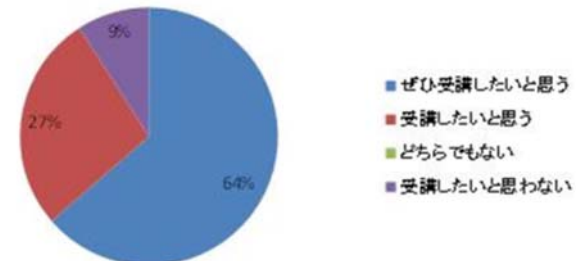
学生による授業評価

参加した学生はおおむね高評価をしている。しかし、専門が違うことによる戸惑いも散見され、今後の参考にしたい。

授業内容の分かり易さ



今後も受講するかどうか



今後の展望

今年度は昨年度よりも参加者数は増える傾向である。適切な規模で継続することにより、学部を超えた授業の構築をすることで、学生に良い刺激を与え、新たな人材育成につながるのか、検証を続けていきたい。

私たちがつながる働き方

これまで、初年次教育や学修／学習支援について何回かこのニュースレターで紹介してきました。学生の多様化や社会からの要請によって、大学の教職員に求められる仕事は増える一方です。FDや学生・学習支援への(半ば強制的な)参加や教育改善といった要請は、特に研究者にとっては「専門外」の仕事であるため、敬遠されることもある一方で、そこから新しい教育観や革新的な教育方法が生まれたり、専門領域別に分断されている教員を横断的につなげたりする可能性も持っています。今回は、「基礎力ゼミ」での取り組みを通じて、部局を越えて教職員がつながり、励ましあい、やりがいを感じる様子を、私の体験を通じて書いてみたいと思います。



FDは何のためのものか



高等教育研究センターが考えるFDの目的は、単に教育改善のための研修の提供に定めるのではなく、それを通して教員のQOL(Quality of Life)を上げることにあります。仕事にやりがいを感じ、仕事を通して成長したり、同僚と目標を共有して共に努力し、励ましあい、喜びを分かち合ったりできるような職場になることを目指しています。これは民間企業で言われていることですが、「従業員の満足なくして顧客の満足なし」というスローガンは、そのまま私たちにも当てはまると考えています。教員が(もちろん職員も)、学生の教育に誇りとやりがいを感じ、自分たちの仕事に満足していなければ、小手先の教育改革は役に立たないだろうと思いますし、学生からもすぐに見抜かれてしまうと思います。

近代の大学が持つ課題の一つは、専門分化が進みすぎたことによる「蛸壺化」です(英語ではこの現象を「サイロ」と呼びます)。それぞれの分野同士の行き来が極端に減り、学問が加速度的に発展することによって、学問と日常生活の関連が見えにくくなったことや、異分野間でのコミュニケーションがとりづらくなり、異なる分野同士の研究者が行き交うことも減りました。隣が何をしている人なのかを知らない大学教員は少なくありませんでしたし、今でも残念ながらその傾向はあるでしょう。

このようなキャンパスの分断は、高等教育に携わる者としての大学教員のアイデンティティを失わせ、大学としての一体感も無くなっていったと、欧米の大学史研究は書いています(日本の場合は戦前と戦後の断絶があり、大学は異なる種別の学校がまとめられて発足したこともあり、最初から一体感や共通のアイデンティティは無かったと言われていました)。それでも、高等教育進学率が低く、卒業すれば自動的にある程度特権的な地位が得られていた間は、学生が授業について来ようが来まいが、学生自身が学んでいる学問と実生活の関連が分らうが分かるまいが大した問題ではなかったのです。大学の外からのまなざしも大学に寛容でした。

さらに、1970年代後半からは知の生産様式が根本的に変わったとも言います。専門分化することによって科学は発達してきましたが、実際の世界にある問題は、分野を横断して解決する必要があるものばかりで、学際的なチームで取り組まなければ答えは出てこないのです。

これは、大学でも同じことだと私は考えます。学生は自分が学ぶ意味を持たずにキャンパスにやってくるようになり、大学に改革の波が押し寄せると、教員が一人で対応するのはナンセンスです。〇〇学の専門家が、現代社会における大学の意味や、大学生の育ってきた文化状況や時代背景を見極め、それにふさわしい教育手法を使い分けることなど期待するほうがどうかしていると思いますし、4年後の就職状況を見据えて、1年生から就職に有利

になるような教育を提供できるわけがありません。自分たちの担当する学生の問題が、個別のものなのか時代に共通するものなのか、対応の仕方がわかっているものなのかそうでないのか、そういった情報収集や努力をそれぞれの教員が個別に引き受けていては、身が持ちません。専門外の人の力を借りて共に取り組むことが解決する方法であり、FDはその手段のひとつになりえます。

「大学生基礎力ゼミ」を担当することによる教員への波及効果

少し話が飛びますが、教育改革や新しい教育プログラムには、教員や教員組織にプラスに働くものがあります。初年次で活用されているラーニング・コミュニティやサプリメント・インストラクションなど(これらについては過去のニュースレターでも紹介しました)は、チームで働くことになるので、教員同士の横のつながりや支えあいが生まれるのです。そしてこのメカニズムは、大学生が大学に適應していく過程と同じなのですが、少しそのからくりを説明しましょう。

「基礎力ゼミ」は信大版の初年次セミナーであり、学生が大学生としてやっていくための基礎的な知識や技術、態度を教えるものです。しかしそれは「見える(=シラバスに一応書けるような)」目的であり、そこには埋め込まれた仕掛けがあります。この「見えない」目的とは、学生の間に「セーフティーネット」を作ることです。

大学に入ってからまず大学が友達作り支援をするのは、友達がいることが学びを支えるからです。わからないことや不安なことを友達に相談したり、困った時には助け合い、試験には励ましあって臨み、単位を取れば互いに喜ぶという仲間がいることこそが、努力する原動力になるのです。授業の理解には全く問題がなくとも、集団の中で自分の居場所がない人は困難を抱える確率が高くなるのが内外の研究でも示されています。

「基礎力ゼミ」では、学生がこのような関係を確立して維持できるように、ほぼ100%でグループワーク形式で進行し、学期の後半では4週間にわたってグループ課題に取り組みさせます。学生はそれぞれの強さと弱さを(最初は受け入れられずに腹を立てたりするのですが)課題を達成する過程で受け入れ、弱さをカバーしあい、それぞれが長所を発揮します。自分たちの考えを素直に恐れずに発表するようになります。最後に課題(グループによる劇の上演)を成し遂げた後の学生の自信と達成感に満ちた顔、互いに信頼し信頼される関係を目撃する喜びは、他ではなかなか味わえません。

このゼミは、中期計画で学生の2割が受講できるような体制をつくること为目标されており、全学教育機構の先生方をはじめ、各センターや学部からもご協力いただいています。特定の学生と数年にわたって関係を持つことのない機構やセンターの



教員の中には、このゼミを担当することによって、自分のゼミを持ったような気持ちになったり、子どもの成長を喜ぶ親のような気持ちになったりする教員もいました。ゼミで学修する内容もあって、学生が立派に育っていく過程を見ることができ、やりがいを感じられるというのです。



教員チームの「セーフティーネット」をつくる

「基礎力ゼミ」を担当する教員には、学期の開始前に研修があり、学期の開始後にも2週間ごとに集まって授業の目的や内容を確認しあう機会を設けています。レポートの採点には、ルーブリックを作って基準を明確にし、すべてのクラスで最低限の質を担保するしくみになっています。ただ、ここが重要なのですが、共通のルーブリックを作って配布するだけでは質が担保される保証はまったくありません。ルーブリックは大枠を定めることしかできず、個々のレポートをルーブリックに照らして採点する時には、やはり難しさがありますし、年度によって学生が得意なところとそうでないところが変化します。

だからこそ、皆でざっくばらんに相談できる場が必要になります。「基礎力ゼミ」は、教えることはすべて決まっていますが、それをどう教えるか、どのように学生と向き合うかには、それぞれの先生のパーソナリティや熱意、何よりも教師としての力量に100%依存します。考え方に違いがあるところもあります。レポートでこういうものが出てきたが何点をつけるのが適当か、それはなぜか、学生がこういう質問をしてきたがどう言えば納得してもらえるか、ここがいつも学生がつまづくところだが、今年はどう工夫したらできるようになるか、といったことを、ああでもない、こうでもない話し合っています。

この、一見無駄に見える時間を定期的につつことで、担当している教員がみな、対等なメンバーであること、誰もが学生のために働きたいと思っていることを共有できるようになります。数年間担当している教員は、新人担当者のメンターになることもできます。学生のことや、授業の運営についてのちょっとしたことを、廊下の立ち話で解決することができます。そして何よりも私たちが大切だと思っていることは、「授業で起こる問題を、その授業を担当する教員個人の責任にしない」ということです。大学の教員も人間です。失敗することもありますし、うまくできないときもあります。忙しくて余裕がなく、十分に学生に対応できないときもある。そういったことも互いに受け入れて、励ましあって助け合うチームに、少しずつ向かっていると感じています。

形だけで年に何回か、FDという形で情報を入れるという研修ももちろん必要です。それを実践してうまくいったときに、それを言える仲間がいたり、それを喜んでくれる仲間がいたら、喜びとやる気がさらに増すでしょう。日々の実践を組織で共有する方法が、強制的なカンファレンスというよりは(ないよりは良いですが)、こういった仲間同士のセーフティーネットの中で自然に実行されれば、私たちが安心して仕事ができ、やりがいが増し、それが学生に間違いなく伝わるという循環ができるのではないかと思います。

最後になりましたが、前期の基礎力ゼミ14コマも無事に終了しました。今年度からはご要望を受けて、後期にも3コマ開講することになりました。「基礎力ゼミ」に賜っていただきました応援と励ましに、担当者一同、心より御礼を申し上げますとともに、今後ともご理解と応援をいただけますよう、お願いする次第です。(加藤善子 准教授)

活動報告

平成30年度FDカンファレンスを実施しました。



小松川先生の講義の様子

「平成30年度信州大学FDカンファレンス」が8月21日(火)・22日(水)の1泊2日の日程で、ビレッジ安曇野にて行われました。今年度は「学生が参加したくなる授業の作り方」というテーマで、学内各部署及び学外から総勢29名の参加がありました。

講師として千歳科学技術大学の小松川浩教授、武蔵野大学の長谷川理講師をお迎えし、「eラーニングを活用した教育の質向上の取組(事例紹介)」をテーマに、全員参加の講義をしていただきました。

また、高等教育研究センターの教員が講師となり、「調査から見る学生の実像」、「支援の必要な学生の見つけ方」、「授業をデザインする」をテーマとしたFDを、e-Learningセンターの教員が講師となり、「小テストの活用」、「映像教材・コンテンツの活用」をテーマとしたFDを行いました。

終了後のアンケートでは、「普段時間をさいて考えることが難しい課題を見直し、議論することができた。」、「他学部の教員と交流できてよかった。」などの感想が多く寄せられ、大変有意義なFDとなりました。



スタッフからひとこと



レスリング、アメフト、ボクシングと続いたニュースに、自戒の念を込めてひとこと。問題となった指導者等が、選手のことを「こども」「子達」と表現したことです。親身になって指導するという意味かもしれませんが、彼らの行動の結果から見ると「支配」や「制御」に近いものでしょう。さて、自分は学生に対して、どうだろうか？
 (高等教育研究センター 矢部 正之)